

鴨越の坂落しはどこか

2024.08.25

「一ノ谷」地名の広狭二義説

学長 田辺真人

はじめに

1. 鴨越の坂落しの意義

二つの位置説

作戦上の意義

位置の根拠

(1)

(2)

2. 一ノ谷の戦い

源平合戦

平清盛：福原庄・築島（経が島）

福原の都1180・06・02～

1180年 8月源頼朝 関東で、

〃年 9月源義仲 木曾で挙兵

10月富士川の戦い→源頼朝は関東経営。

(→義仲は北陸に出、京に進軍

12月清盛は、平安還都

1181・2・4清盛病死（平 宗盛ら）

平氏滅亡：義仲進軍→1183年半、平家の「都落ち」 → 義仲上洛。貴族と対立→

1184年 1月源氏、滋賀で決戦（→1・20義仲敗死）

／ 1・26 平氏、福原・兵庫に

★ 〃年 2・7「

平氏敗走→四国屋島へ 1185・2 屋島の戦い → 〃・3 関門海峡の壇ノ浦で平家滅亡

『平家物語』

平家はこそこの冬の比より、讃岐國八嶋の磯をいでて、攝津國難波瀨へをしわたり、福原の舊都に居住して、西は一谷を城郷に構へ、東は生田の森を大手の木戸口とぞさだめける。其内福原・兵庫・板屋と・須磨にこもる勢、これは山陽道八ヶ國、南海道六ヶ國、都合十四ヶ國をうちしたがへてめさるところの軍兵也。十万餘騎とぞ聞えし。

『義経記』

軍にも風波の難を恐れず、舟楫を走り給ふ事鳥のごとし。一谷の合戦にも城は無雙の城なり。平家は十萬餘騎なり。味方は六萬五千餘騎なり。城は無勢にて寄手は多勢こそ、軍の勝負は決し候に、これは城は大勢、案内者寄手は無勢、不案内の者どもなり。たやすく落つべきとも見え候はざりしを、鴨越とて鳥獸も通ひがたき巖石を無勢にて落し、平家を終に追落し給ふ事は凡夫の業ならず。

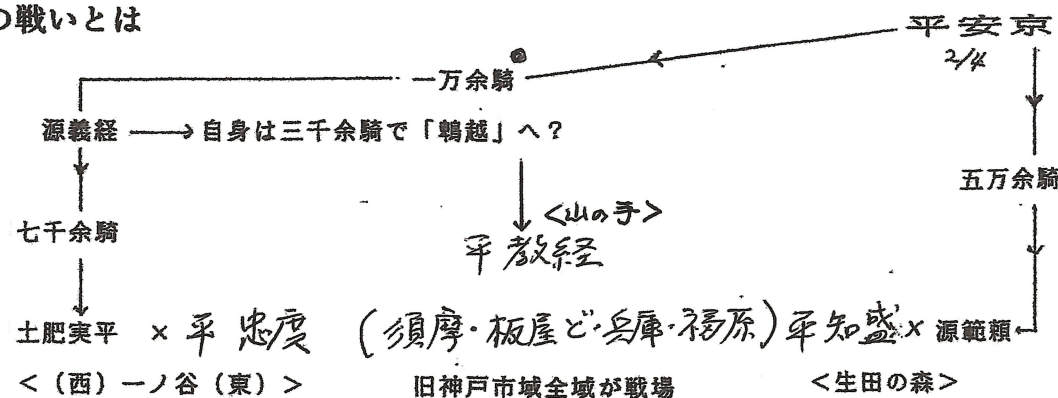
をぞつけられる。兄の越前三位通盛卿あひくして山の手をぞかため給ふ。山の手と申は鴨越のみもとなり。

六日の明ぼのに、九郎御曹司、一万餘騎を二手にわかして、まづ土肥次郎實平をば七千餘騎で一谷の西の手へさしつかはす。わが身は三千餘騎で一谷のうしろ、鴨越ををさむと、丹波路より搦手にこそまはられけれ。

七日の明ぼのに、一谷のうしろ鴨越にうちあがり、すでにおとんとし給ふ九郎御曹司搦手にまはして

3. 一ノ谷の戦いと「飛脚」

(1) 一ノ谷の戦いとは



(2) 鴨越の坂落としの位置 — 2地点の可能性

(3) 田辺真人「一ノ谷地名広狭二義説」の論拠

『吾妻鏡』

八日、丁卯、關東の兩將、攝津國より飛脚を京都に進ず、昨日一谷に於て合戦を遂げ、大將軍九人を梟首す、其外誅戮千餘輩に及ぶの由之を申す。九日戊辰、源九郎主人入洛す、相具するの輩幾ばくならず、從軍追つて参洛す可きか、是平氏一族の首を大路に渡さる可きの旨、奏聞の爲、先づ以て鞭を揚ぐと云々、十五日、甲戌、辰刻、蒲冠者範頼、源九郎義経等の飛脚、攝津國より鎌倉に参著し、合戦の記録を獻す、其趣、去る七日、一谷に於て合戦す、平家多く以て命を損す、前内府已下海上に浮びて、四國の方に赴く、本三位中將は、之を生虜る、又通盛卿、忠度朝臣、經俊、經正、師盛、教経、實盛、教盛、知章、業盛、盛俊、經正、經俊、此外梟首する者一千餘人、

『平家物語』

壽永三年二月七日、攝津國一谷にてうたれし平氏の頭ども、十二日に宮へ入る。

薩摩守忠度は、一谷の西手の大將軍にておはしけるが

「六日の明ぼのに、九郎御曹司、一万餘騎を二手にわかして、まづ土肥次郎實平をば七千餘騎で一谷の西の手へさしつかはす。わが身は三千餘騎で一谷のうしろ、鴨越ををさむと、丹波路より搦手にこそまはられけれ。」
「一谷の東西の木戸口にて源平矢合とこそさだめけれ。さりながら、四日は吉日なればとて、大手搦手の大將軍、軍兵二手にわかして都をたつ。」
「さる程に、源氏は四日よすへかりしが、故入道相國の忌日ときいて、佛事をとげせんがためによせず。五日は西ふさがり、六日は道忌日、七日の卯刻に、一谷の東西の木戸口にて源平矢合とこそさだめけれ。さりながら、四日は吉日なればとて、大手搦手の大將軍、軍兵二手にわかして都をたつ。」

武功の達者一度も慣れぬ船

